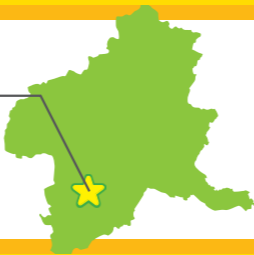


うどんを通して広がるコミュニケーションの輪

富岡市

富岡ふれあいの居場所 **ぬきさき元気会**

富岡市が、年齢や性別を問わずに集い、互いに支え合える拠点づくりを推進している「ふれあいの居場所づくり」事業。その一つ「ぬきさき元気会」は、人々の笑顔の拠点になっている。



手際よく大人数分のうどんを準備するメンバー



食べに来る人も笑顔がこぼれる

●活動内容

毎月第1・第3木曜日、「富岡市社会教育館」は、シニアを中心に大勢の人でにぎわう。「ぬきさき元気会」主催の「うどんの会」が開かれているからだ。

国の登録有形文化財でもある「富岡市社会教育館」が「ぬきさき元気会」の活動拠点。「うどんの会」は毎月2回開催され、毎回10～20名のメンバーがボランティアとしてうどんをふるまう。高齢者を中心に、毎回80名ほどの人がうどんを食べに訪れる。サラリーマンや小さな子どもを連れた母親の姿もあり、11月のもみじ祭りの際に、300人分を提供する人気ぶりだ。

うどんの会に合わせて、地域住民の「ハーモニカの演奏会」をはじめ「前橋のカップレ」や、全国から多くの団体が演目を披露する。これは、ぬきさき元気会が毎回違う団体を招待しており、うどんを食べたあと、別の部屋で演目を楽しんでもらう趣向だ。もちろん、招待した団体にもうどんをふるまう。

ぬきさき元気会では、うどんの会のほかに、手作りのお手玉を小学校に寄付したり、施設などでフラダンスを披露するなどの活動も行っている。

●事業を始めたきっかけ

社会全体の高齢化が進み、一人暮らしや高齢者のみの世帯が増加する中、富岡市は、住民同士が支え合う基盤づくりの一環として、「ふれあいの居場所づくり」に取り組む。団体に補助金を支給し、生きがいや心のよりどころとなる居場所づくりに力を入れている。

「ふれあいの居場所」とは、年齢や性別を問わず誰でも気軽に集い、自由な時間を過ごすことができる場所であり、行政からの押し付けではなく、あくまでも市民が主体。運営者の趣味や特技、知識や経験を活かして多彩な活動が展開されている。

「ぬきさき元気会」は、平成18年にスタートしたうどんの会が前身であり、地域の人に無料でうどんを食べてもらうことで、地域交流に貢献してきた。

東日本大震災の際に、二千個余りの枕を作って現地に寄付するなどのボランティア活動も行い、会員同士の絆を深めてきた。

そして、同会の活動に注目した富岡市が声をかけたことがきっかけとなり、うどんの会のメンバーが高齢者の居場所づくりとして「ぬきさき元気会」を結成し、現在に至っている。



毎回大勢の人でにぎわう「うどんの会」



うどんを食べたあとは、別の部屋で催しを楽しむことができる

●工夫している点・特長

東日本大震災の際に被災地へ寄付した枕は、その後富岡製糸場にちなんでまゆの形に変更。まゆ型枕は、富岡という土地柄を生かし、シルクの着物をほどこいて作っている。銀座にある県のアンテナショップ「ぐんまちゃん家」で販売したところ、大ヒット商品となった。売り上げは、会の運営資金に充てている。

メンバーは、昔からこの地に住む人や嫁いで来た人が中心で、お互いに気心が知れている。活動日に都合が悪くても連絡を入れ、他のメンバーがカバーしてくれる。会員同士のコミュニケーションの良さはもち

ろんのこと、うどんの会を訪れた人同士が仲良くなり、気軽に情報交換できる楽しさがある。

代表を務める勅使河原澄江さん(69)は、介護福祉士の資格を活かしてホームヘルパーとしても仕事をしている。資格と経験は、今後、ぬきさき元気会で福祉的な活動をするときにも役立つと考えている。

町の人、さらには遠くからのゲストを巻き込んで、人と人とのつながりを生み出しているぬきさき元気会。うどんを食べに来る人と、ふるまう側が一体となって地域貢献の一翼を担い、生き生きと活動している。



〈やりがい・楽しみ〉

「うどんを食べに来る人が喜んでくれるのが何よりもうれしい」、「食べに来る高齢者が最初の頃よりも生き生きしてうれしい」と言う。「この会がなければ、一週間以上家から一歩も外に出ない、誰とも口をきかない、という人

も、みんなとおしゃべりするから、元気になってきている」。会のメンバーは、何よりも訪れる人の笑顔に励まされるという。より積極的な活動に向け、今後「ぬきさき元気会」をNPO法人として活動を充実していく予定だ。

基礎データ

☎0274-63-6415
ぬきさき元気会
事業開始時期／平成24年
主な活動／うどんの会
枕の製作など
人数・年齢／
30名 60～80歳

